

メルボルン大学の先住民研究者一行が来訪

6月22日（木）～29日（木）、メルボルン大学からバリー・ジャッド先住民担当DVC（Deputy Vice-Chancellor；理事相当）、アaron・コーン先住民研究所長、カーステン・クラーク同研究所職員、リチャード・チェンホール医療人類学教授、マーゴット・イーデン先住民戦略担当課長、グローバル先住民修士課程を教えるカミオ・ダリー講師、先住民所蔵物管理長のヴァネッサ・ラス上級講師、先住民研究データネットワーク構築に携わるクリステン・スミス首席研究員、リヴァイ・マレー戦略マネージャー、トレント・ライアン研究員の計10名が来訪しました。

両大学は、長年の感染症、ナノ材料研究連携をもとに、2021年末から全学的な連携強化を図っているところです。先住民研究は、アイヌ・先住民研究センターを有し、総長直下教員組織の国際連携研究教育局（GI-CoRE）でも当該分野を推し進める本学と、先住民知識研究所を設立し、初の先住民担当の理事職を設けたメルボルン大学の双方にとって、大きな意味を持つ分野

です。

今回、先住民研究者一行は、加藤博文アイヌ・先住民研究センター長らとともに、平取町の二風谷コタン、白老町にできた民族共生象徴空間ウポポイ、札幌アイヌ協会への訪問、複数回のアイヌの方々との会合を行いました。先住民コミュニティにおける貧困・アルコール中毒・家庭内暴力問題、キャリアパス形成、大学や国が有する先住民所蔵物のオーナーシップといったことから、両親のどちらかのみが先住民の世帯や都心で生まれ育った先住民出身家庭のルーツへのアクセスのし難さは、豪日で共通の関心テーマでした。また、大学運営と先住民、先住民出身ではない研究者が先住民研究に関わる意義と難しさ、学術機関所属者がコミュニティへ入り研究を行うプロセス、閉じた環境に陥りがちの先住民コミュニティを海外の先住民コミュニティと繋ぐという大学の役割、大学が先住民関係における官民コミュニケーションの場を提供すること、先住民研究分野の共同教育等の様々な議論が

交わされました。

6月28日（水）に開催された「北海道大学・メルボルン大学先住民研究に係るコンファレンス」には、メルボルン大学からマイケル・ウェズリー国際・文化・外部連携担当DVC、エイドリアン・リトル国際担当PVC（Pro VC；副理事相当）、アレックス・ジョンソン理学副研究院長、キャロル・チェン国際担当職員が、駐日オーストラリア大使館から教育・研究担当のジャン・ピット参事官と塚本久美子首席マネージャーが駆け付け、寶金清博総長、高橋 彩理事・副学長（国際）、横田 篤理事・副学長（財務・SDGs）、保健科学研究院の山内太郎教授らに迎えられました。国際・理学関係一行は、農学・食資源学、人獣共通感染症、理学の研究者との懇談を行い、今年7月、11月に北海道、メルボルンでそれぞれ開催される農学系ワークショップに繋がる良い機会となりました。

（アイヌ先住民研究センター／国際連携研究教育局、国際連携機構）



全学コンファレンス



先住民と健康に係るワークショップ



国際担当執行部の農学・食資源学訪問



ジャッド先住民担当DVC